

令和6年播種用水稲種子の適正な種子予措について 【高温登熟種子のため休眠が深く基本管理徹底をお願いします。】

【高温登熟種子の状況】

昨年**登熟期の異常高温により休眠が深くなっています**。令和5年産（令和6年播種用）種子の発芽試験では、発芽率は種子規格の90%以上を確保していますが、**播種から出芽揃いまで時間がかかる（発芽勢がやや低い）状況です**。

種子として問題はありませんが、上記の傾向がありますので種子予措においては、基本管理を今まで以上に徹底してくださるようお願いいたします。

また、高温登熟の影響によりふ割れした粃や枝梗が残っているものもあり外観上も例年より見劣りする粃の状況となっており、「準種子」になったものもあります。

【種子予措・管理の留意点】

浸種

- 高温登熟により吸水しにくい場合があります。**浸種水温は10℃～15℃を確保し（浸種開始は水温を確保しやすい4月上旬から）、適正な日数で行ってください**。日平均積算温度で100℃・粃殻を透かして胚が白く見えるようになった時が浸種終了の目安です。
- 種子消毒剤は浸種開始から吸水とともに消毒効果が発揮されます。**低温では消毒剤が粃に浸透しにくくなりますので、水温の確保（特に浸種開始2日間）が重要です**。温暖な日からの浸種が基本ですが、状況に応じお湯で水温の調整をお願いします。
- 温湯消毒種子も含め、浸種期間は例年通り2～3回水交換を行い清潔に保ってください。
また、**低温下の浸種は休眠が深まり、さらに催芽ムラを助長する恐れがあります**ので屋内での設置や桶の上にコンパネ等で蓋をする等極端な温度変化を避けて管理しましょう。

催芽

- **催芽開始時は、種子袋内部の種子まで均一な温度となるよう36～40℃の湯通しを行ってから適正温度30～32℃で24時間の加温が基本です**。
- ハト胸程度を目標とします。種子袋の表面だけでなく内部の発芽状態も確認し発芽ムラを抑えましょう。**催芽揃い状況を確認し、必要に応じて催芽時間を延長してください**。
- **複数品種を栽培する場合は、品種間の出芽揃いが異なることが想定されます**ので、しっかり品種別に発芽状況を確認して催芽を行ってください。

播種

- 枝梗が残っている場合もありますので、**播種ムラや詰まりがないかを確認しながら作業を行ってください**。
- **播種時の育苗箱（床土）への灌水は浸み渡るよう十分に行い、均一播種に努めましょう**。床土に水が浸み込まない状態の覆土は酸欠になる場合がありますので灌水量を調整してください。